

ダイヤモンド・プリンセス集団感染 高山医師が悔やむ「最大の失敗」

3/18 現代ビジネス



写真=UPI/アフロ（日経ビジネス電子版）

クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」で新型コロナウイルスの集団感染が発生してから早5年が経過した。連載第1回（「ダイヤモンド・プリンセス」集団感染から5年 検証進まず憤る乗客）では、ダイヤモンド・プリンセスの乗客が当時の対応に今も疑問を繰り返す現状を伝えた。一方で対応に当たった医療関係

者ら支援側も混乱を極めた。病床が不足し、特に受け入れ病院の確保が最も困難だった。今後もやってくる可能性があるパンデミック（世界的大流行）に向けて、必要な検証はいまだ進んでいない。

「災害派遣医療チーム（DMAT）が軽症と判断したとしても、新型コロナウイルスは時間経過とともにすぐに中等症に変化する」

当時、厚生労働省の対策推進本部医療班に入り、**ダイヤモンド・プリンセスにおける新型コロナウイルスの集団感染に対応した沖縄県立中部病院感染症内科で医師を務める高山義浩さん（55）**は、当時の状況について、こう振り返る。

ダイヤモンド・プリンセスは20年1月20日に横浜港を出港。香港からベトナム、台湾などを経由して沖縄・那覇港に寄港し、横浜港へと帰港する予定だった。だが2月1日、横浜港から乗船し香港で下船した香港人男性が、新型コロナウイルスに感染していたことが判明する。

ダイヤモンド・プリンセスは横浜港に帰港するものの乗客は船内待機を余儀なくされ、集団感染と長期隔離という地獄絵図が起きた。

高山さんは、ダイヤモンド・プリンセスが横浜港に入港した翌日の2月4日、厚労省からの要請により対策本部に加わった。10日には船内の感染者数が65人に膨れ上がり、対応に忙殺されることになった。

最も困難だったのは、船外に運ばれてくる感染者の搬送先となる病院を見つける作業だった。ダイヤモンド・プリンセス内には、神奈川県の出動したDMATが乗り込み、患者の容体によって即座に治療が必要か、それとも後回しにするのか、識別（トリアージ）を行っていた。

酸素投与が必要な中等症以上の患者搬送が最優先だが、軽症であっても高齢者や基礎疾患のある人は優先的に搬送が必要だと判断された。そのリストが数時間おきに、対策本部の高山さんのもとへ送られてきた。

「DMATが優先的に搬送が必要だと判断したハイリスク患者の容体は、診断時に軽症であっても2〜3時間で重症化することが少なくなかった。病院になんとかお願いし、当日中に

受け入れてもらうしかない」

ダイヤモンド・プリンセスに乗船していた乗員・乗客は 56 カ国・地域の人々。その多くが高齢者だった。日本語が全く話せない人も多く、こうした外国人患者の受け入れを躊躇（ちゅうちょ）する病院もあった。

とにかく頭を下げて、関東周辺の病院に電話をかけまくるしかない。高山さんは自身の感染症医としてのネットワークも最大限活用し、患者の状態や受け入れ先の条件、病床数などを照合し、ギリギリのラインを探った。

神奈川県内や都内の病床はすぐに逼迫し、搬送先の病院は愛知や長野にまで及んだ。

「睡眠時間は毎日 4 時間ほど。みんなギリギリの状態だった」

高山さんは当時を振り返る。「時間の感覚を失っていて、深夜に病院へ電話をかけてしまうこともあった。しかし、先方の担当医も起きており、普通に打ち合わせが行われた」（高山さん）。

●時間の経過で重症化するコロナウイルス

高山さんが悔やむのは、ダイヤモンド・プリンセスで集団感染が発生した当時は、まだ新型コロナウイルスの病状が、どう変化するかがはっきりと分かっていなかった点である。船内で DMAT が軽症と判断していても、搬送先についた時には患者の容体が悪化しているケースは多かった。「当初は DMAT のトリアージを疑った」（高山さん）。だが時間の経過とともに重症化しうることこそが、新型コロナウイルスの恐ろしい特性だった。

もっと適切な感染対策や治療ができたのではないか——。高山さんが、ダイヤモンド・プリンセスにおいて「最大の失敗だった」と振り返るのが、下船した香港人男性の感染が通報された直後の船内対応だった。

この時、即座に船内で感染拡大を防ぐための対応が取れていれば、感染はもっと抑えられていた可能性がある。ダイヤモンド・プリンセスでは、下船した乗客の感染が判明した後も、ダンスパーティーやバー、映画など、乗客が大人数で集まる機会が続けられていた。

そもそもダイヤモンド・プリンセス自体の医療体制についても、運航会社の認識が甘かった可能性がある。ダイヤモンド・プリンセスに乗船していたのは外国人医師 2 人のみ。56 カ国、約 3700 人の乗員・乗客を乗せたダイヤモンド・プリンセスはまさに洋上の国際都市だ。いつ、どのような感染症の拡大が起こってもおかしくはなかった。明らかに船内の医療体制は手薄だった。

「検証どころか、参考にできる資料さえない」

新型コロナウイルス感染拡大の初期に、多くの課題と教訓をもたらしたダイヤモンド・プリンセスにおける集団感染事故。5 年の年月が経過した今、当時の対応について十分検証されたとは言い難い。

例えば 20 年 5 月に政府がまとめた「ダイヤモンド・プリンセス号現地対策本部報告書」はわずか 6 ページの分量だ。23 年 9 月に国土交通省が公表した「クルーズの安全・安心の確保に係る検討・最終とりまとめ」では、ダイヤモンド・プリンセス号に関する記載はわずか 2 ページにとどまる。ダイヤモンド・プリンセスに乗船していた乗客の 1 人、平沢保人さん（69）は「検証どころか、参考にできる資料さえない」と憤りを見せる。

ダイヤモンド・プリンセスと同じような規模の船内感染が起きたオーストラリアの「ルビー・プリンセス」では、オーストラリア州政府の特別調査委員会によって、運航会社や

乗員・乗客への調査が行われ、300 ページを超える詳細な検証報告書が公表されている。

実際、ダイヤモンド・プリンセスにおける対応の落ち度について、ここに来て新事実も判明している。

ダイヤモンド・プリンセスは横浜港に入港する前の2月1日、那覇港に寄港し、すでに一度検疫が行われていた。しかし乗客によると、体温を測り、2週間以内の武漢への渡航の有無を聞くのみで、検疫は決して十分とは言えないものだった。

すでに、1月末には世界保健機関（WHO）によって、パンデミックが差し迫っているとして、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態（PHEIC）」が宣言されていた。

厚生労働省の開示文書によると、那覇港における検疫終了時刻は午後8時10分だが、乗客によると、午後3時頃にはすでに下船が始まっていたという。本来、検疫法では検疫が終了し、仮検疫済証が発行されなければ下船はできない。

その結果、下船したダイヤモンド・プリンセスの乗客を乗せた、タクシードライバー2人が新型コロナウイルスに感染した事実はあまり知られていない。

厚労省の那覇検疫所は日経ビジネスの取材に対し、「当時の対応についてのコメントは差し控えたい」と回答している。

「幸い自分は元気に生きている。亡くなった方に申し訳ない気持ちが消えない」

ダイヤモンド・プリンセスの集団感染から5年となる追悼集会に参加した当時の乗客は、横浜港大黒ふ頭の冷たい風にかき消されるような声でつぶやいた。

集団感染が原因で亡くなった尊い命に報いるためにも、ダイヤモンド・プリンセスで起きたことを風化させてはいけない。当時の対応を振り返り、十分に検証することが、今後現れるかもしれない未知のウイルスに対応する備えになる。